

8

ポンペの『簡約薬物学提要』と 司馬凌海の『七新薬』と『朋百氏薬論』

相川 忠臣

日本赤十字社長崎原爆病院

ポンペのオランダ語薬物学講義ノートはBeknopte handleiding tot de geneesmiddelleer『簡約薬物学提要』として1862年末、DesimaのNederlandsche Drukkerij(出島阿蘭陀出版所)から出版された。ポンペのオランダ語各科講義ノート中出版されたのはこの書のみであり、ポンペの日本語に翻訳した各科の講義録は日本各地で見つかるが、出版されたのは司馬凌海の『七新薬』と『朋百氏薬論』だけである。ポンペによれば『簡約薬物学提要』はウーストルレン Oesterlen, ペレイラ Pereira, メッテェルリク Mitscherlichの3書からの引用であり、ウーストルレンを主とし、日本人に合わせて薬用量を減らしている。1859年末海軍伝習派遣隊がオランダに帰国する際、出島阿蘭陀出版所はフォン・シーボルトに引き継がれ、出版所の責任者インデルマウル G. Indelmaur(派遣隊看護長, 家業印刷業)は帰国せず別名シーボルト出島印刷所で働いた。日赤松江病院所蔵のこの書には中表紙裏に G. Indelmaur の名があり、活字が明瞭な印刷である。この本は総論と各論に分かれ、明治2年に出版された司馬凌海の『朋百氏薬論』2巻は総論のみの翻訳である。その序文に松本良順から門人にポンペの多くの講義録を翻訳分担させる際、凌海は薬性之学を勉めるようにとの命を受けたことが書かれていて、その責務を果たすべく総論を翻訳出版したが、各論は出版されなかったらしく、明治3年には W. ウイリスの薬物学講義の凌海による翻訳、東京医学校官版『薬範』が出版されている。愛知県公立医学校で診断学、薬物学、羅典学、処方学の講義を担当したことからわかるように、凌海が専門とするのは薬物学であった。文久2年(1862)出版の凌海の『七新薬』は、ポンペの薬物学講義ノートを基礎にしてヨード化合物(梅毒瘰癧, 結膜炎)、硝酸銀(潰瘍収斂剤)、酒石酸アンチモニウムカリウム(駆虫剤)、キニーネ(解熱剤)、サントニン(駆虫剤)、モルヒネ(鎮痛剤)、肝油(滋養剤)について原典のように健康作用と醫治作用を書き、凌海の意見を入れており、当時評判の高い書であった。ポンペの所説はウーストルレンとワグネル R. Wagner(ポンペのオランダ語化学講義ノートの主たる原典, De scheikunde 1856 重訳)に基づいていると凌海は書いているが、ポンペはワグネルでなく、定評のあるミッテェルリク E. Mitscherlich の化学書(Lehrbuch der Chemie 独)を使用した。凌海はしばしば出島の書庫に入り、『七新薬』によれば薬物学ではウーストルレン、リクトル、コステル(重訳)、アッセン、ウ井ットステーン、ペレーラ、ジャンバンエ、化学書ではレーマン、ワグネル、ギラルディン、トィリクト、局方ではオランダ、ジャワ、イギリス、新報紙ではオランダ、イギリス、アメリカと広範に調べた。ポンペの機嫌をそんじたが、ポンペ時代の出島の書籍がわかる。

文久元年3月には『七新薬』の版下を大坂に送っている。ポンペは「二、三の学生が江戸から出島に派遣された。その中には將軍の侍医の子息松本良順も含まれていた。」と書いている。良順の門人帳、登籍人名小記の最初の3人には土肥普裕、榊原養庵、司馬凌海とある。土肥、榊原がまず長崎に来て、佐渡から凌海が少し遅れて到着した。ところが榊原が文久元年5月に有罪除籍、凌海も6月に有罪除籍になっている。『七新薬』の出版計画がポンペを怒らせたので、良順はやむをえず出版に関わったかもしれぬ榊原、ついで凌海を破門したのであろうか。関寛齋の校補を受けて凌海の『七新薬』は翌年出版されるが、遅れぬようにポンペは『簡約薬物学提要』を多忙な中1年もかけて書かざるを得なくなった。